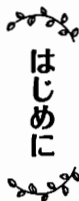




はじめに



私は、1989年4月に弁護士登録をして以来、一般民事を中心に弁護士業務を行ってきた。

なかでも、離婚案件の取扱い件数が多い。離婚案件では、妻たちは、結婚生活における夫の言動に傷つき、涙を流していた。妻側の弁護経験を深めていくに従い、妻の立場から結婚生活を見つめ直す機会が増えていった。離婚案件に登場する夫たちは、押し並べて横暴、理不尽、感情的で、いつでも怒っていた。まったく自省せず、妻が悪いと怒鳴っていた。夫から謝罪の言葉を聞くこともあったが、真に反省する者に出会うことは稀であった。これは一体、何なのか。離婚事件にはいつもモヤモヤが付きまどっていた。

フランス人医師マリー＝フランス・イルゴイエヌ氏は、夫たちのモラルハラスメントを「発見」し、1998年、著書を発表した。離婚弁護士たちは、それまで夫たちに感じていたモヤモヤが言語化され、離婚案件においてモラハラが語られるようになった。

あらためて、モラハラの視点で日本の夫婦を見直すと、モラハラの言動は日本の多くの夫に共通していた。妻たちの多くは、「こんな人とわかっていれば結婚しなかった」と後悔の念を語っていた。妻が逃げ出し、離婚調停を経て、離婚裁判になってもなお、夫たち

は、再同居し、やり直せると主張していた。夫たち、妻たちは、結婚当初から離婚成立に至るまで、すれ違っているのである。私は、数多くの離婚案件を扱い、経験から学んできた。それは、①モラ夫を人格障害、サイコパス、その他精神疾患と説明する俗説は、被害妻を納得させる部分はあるものの、現実のモラ夫（の少なくとも家庭外での言動）を説明できないこと、②モラ夫たちの認知は歪んでおり、自らの横暴さを認めないこと、③被害妻たちは、日常的モラハラにより自尊心を削られ、モラ夫への恐怖を行動・思考基準としていること等である。

なお、本書での記述は私個人の見解だ。しかし、現実にはモラ夫との結婚生活に悩む妻たちは多い。多くの被害妻たちは、日々、モラ夫からデイスられ、心身の健康を蝕まれている。ところが被害妻たちは、「妻として不足のある私が（も）悪い」と自責の念に苛まれている。この本は、そんな被害妻たちを念頭に書いた。

また、既婚、未婚を問わず、男性たちは、自らの人生観、価値観を見直し、健全男子を目指すことも可能である。それは、周りへ不幸を撒き散らさないだけでなく、自らの人生に幸福と心の豊かさを招くに違いない。本書は、男性たちに対する「健全男子の勧め」でもある。



目次

第1章

あなたは、夫が
好きですか、嫌いですか？

「俺の飯は？」…………… 2

そんなに言うなら、やらない！…………… 4

モラスイツチ…………… 6

コラム ハネムーン期…………… 8

モラ夫とは？…………… 9

結婚とは何か？…………… 12

ガチャ音が怖い！…………… 15

第2章

なぜ男は結婚すると
変わるのか？

突然いばりだす男たち…………… 20

基礎人格の形成と

モラ文化の取り込み…………… 22

歪みの累積とモラ脳…………… 24

健全男子への擬態…………… 31

歪んだ「男らしさ」、支配消費

の対象としての「女性」…………… 35

モラスイツチは、いつ入るか

脳内麻薬によるモラハラ依存…………… 42

コラム 脳内麻薬…………… 44

洗脳とモラハラ強化の悪循環…………… 45

家庭の崩壊…………… 47

家庭崩壊後のモラ夫と被害妻

モラ夫は治らない…………… 52

離婚へのきっかけ…………… 54



第3章 なぜ女は

被害妻となるのか？

主人の許し……………56

コラム 夫婦同姓についての

最高裁判決……………59

基礎的人格の形成、

女・妻としての振る舞い……………60

刷り込まれた「幸福」……………63

愛は困難を超える？……………65

被害妻の特徴……………67

「弁が立つ」「ソトツラがよい」

はモラトークのせい……………70

洗脳が抵抗力を奪う……………76

モラ結婚と成田離婚、

熟年離婚……………79

第4章 モラハラが夫婦、

子どもに及ぼすもの

妻の思考を縛る脳内モラ夫……………84

妻を襲う心身症、「夫源病」……………87

モラ被害のパラドックス……………89

モラ夫は残虐か？……………91

コラム ミルグラム実験……………93

モラ結婚による不可逆的な変化……………94

別居後もモラ被害を受け続ける……………96

モラ文化の継承・ミニモラの誕生……………98

面前モラで脳を損傷し、

萎縮する子どもたち……………100

結婚しない若者たち・

少子高齢化の真の原因……………102

モラハラは、モラ夫自身も不幸にする……………104



第5章 モラ夫を育むモラ文化

モラハラの原因は人格障がい？	108
貝原益軒の教え、「教女子法」	111
コラム 江戸時代の子育て	115
日本の近代化とモラ文化	116
法規範となったモラ文化	118
憲法が目指した「両性の本質 的平等」とモラ文化	120

第6章 我慢か、離婚か

不幸を放置しない	124
モラ被害のパラドックス	126

怒らせる私が（も）悪い？

子にモラ夫が必要か？

両親、親族の反対

夫を怒らせたくない

この結婚を失敗に

終わらせたくない

結婚継続か、離婚か

昔の優しい彼に戻るか？

モラ夫更生は、まず不可能

モラ夫更生への道①【導入】

モラ夫更生への道②

【プログラムの策定&実行】

仮面婚の継続

結婚制度の失敗

「結婚」はどうあるべきか

129

132

136

138

140

142

144

146

148

150

151

154

156

156

第7章 離婚の進め方

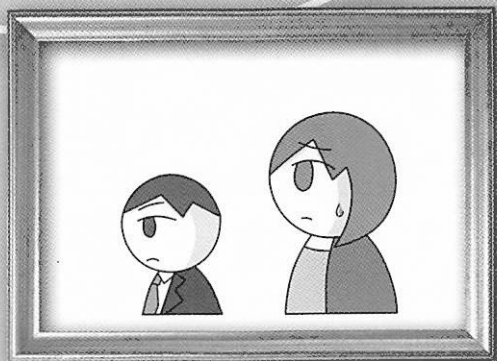
離婚するため	160
目標を立てる	161
離婚に向けての準備	163
経済的独立	164
離婚理由の補強	165
不貞の有無の確認	168
「キラー書面」の作成、交付	170
各種離婚条件の整理	176
別居の実行	180
離婚協議、離婚調停	184
面会交流と子どもの福祉	188
離婚裁判	189

第8章 婚前モラチエック

モラ夫予備軍の特徴から 擬態を見破る	192
自動思考のチエック	193
モラ夫の性行動	195
「男であること」への拘りと歪み	198
女性を支配／消費の対象とする	200
性別役割分担の当然視	202
過去の交際歴、結婚歴	204
モラ度を予想する	206
モラチエックに該当したら？	211
幸せになる！	214

第1章

あなたは、
夫が好きですか、
嫌いですか？



「俺の飯は？」



あなたは専業主婦だとする。熱が出て寝込んでしまい、夕食の支度ができなかった。そこへお腹を空かせた夫が、疲れて仕事から帰ってきた。

あなたは、「ごめんなさい」と謝る。そして、「具合が悪くて、休んでいました」と弁明する。



さて、夫は何と言うだろうか？

健全男子であれば、「大丈夫か？」とあなたを心配するだろう。ところが日本の男性には、心配する言葉もかけず、「俺の飯は？」と尋ねる人も少なくない。目を剥いてあなたを凝視してくるかもしれない。あなたは、「ごめんさい……」とまた謝る。

夫はさらに、「ふん、使えない女だな」「三食昼寝付き、いいご身分だな」などと嫌味を言うかもしれない。「誰のおかげで食ってるんだ？」と説教が始まるかもしれない。口もきかずに黙って家を出て行き、一人で外食をし、夜遅くに酔って帰宅するかもしれない。はつきり言おう。このような反応をする夫は、モラ夫（モラハラ夫）である。

パートナーを愛し、その人格を尊重していれば、妻の具合を心配するはずだ。食事の用意ができていなかったら、夫が自分で作ればよい。妻に何が食べたいか聞き、妻の分も作るべきだ。それが対等なパートナーの在り方であろう。

ところがモラ夫は、妻を「家事、育児をする者」「俺の世話をする者」「俺に従う者」と理解する。モラ夫の人格の基礎には、「男尊女卑」「イエ制度」「性別役割分担」の価値観が埋め込まれている。私はこれらの価値観、社会的・文化的規範群を「モラ文化」と名付けている。

そんなになら、やらない！



ある妻は、夫が皿洗いを「手伝ってくれる」「優しい夫」と惚気のろけるかもしれない。なるほど、日本の標準では、「皿洗いを手伝ってくれる」夫は「優しい夫」と言っているかもしれない。

さて、夫が洗った皿の汚れが落ちていなかったとする。妻は、「あら、汚れが落ちてい



ないよ」と指摘する。すると夫は、「そんなに言うなら、やらない！」と不貞腐れる。

妻がたった一言指摘しただけで「そんなに言う」は、明らかに誇張だ。健全男子であれば、汚れを確認してそれを落とし、次からの洗い方を考えるだろう。あるいは妻に対し、どう洗ったらよいか、素直に聞くかもしれない。

では、(一部の)夫は、なぜ不貞腐れるのか。それは彼らの心の底に、「家事は妻がやるべきこと」という考え(≡性別役割分担)があるからであろう。「本来は妻の仕事である家事を、手伝ってやっている」のに、文句を言うなんてとんでもない」と感じているのだ。特に深い思慮もなく、何かに遭遇したときに自然に湧き上がってくる思いや考えを「自動思考」という。自動思考は、その者の人格の基礎部分に取り込まれた価値観の反映でもある。したがって、自動思考を観察すれば、その者の価値観、基本的な考え方がわかる。つまり、「つい口が滑って言ってしまうこと」にこそ、その者の本性が現れるのである。

モラスイツチ



何かのきっかけで、夫の妻に対する態度がガラッと変わり、モラハラが始まることがある。私はそのきっかけを「モラスイツチ」と呼んでいる。

例えば、結婚式の晩から突然いばりだす夫や、新婚旅行の飛行機の中で、「今日から俺に従え」と宣言する夫もいる。何か気に入らないことがあると、突然黙り込んでガン無視



を決め込む夫もいる。この「ガン無視」が、モラハラの始まりだったという事例は多い。

1990年代頃に話題となった「成田離婚」の大半は、夫のモラスイッチが入り、夫が「不機嫌のかたまり」になることから始まったのではと推察する。妻は、結婚前まで優しくかつた夫とのあまりの違いに驚き、「こんなはずではなかった」と激しく後悔する。

他方、夫は自らの基本的な価値観に照らして当然の振る舞いをしているだけであり、非難される言われはないと信じているので、まったく引き下がらない。少しでも優しさが残っていたら、「俺の言い方がきつかった」程度の譲歩はするかもしれない。しかし、「お前のほうだって…」と新妻の落ち度を探し出して、非難することも忘れないだろう。

モラスイッチが入るのは、結婚や新婚旅行とは限らない。子どもの出産、勤務先での昇進、マイホーム取得など、その夫が「主人」となったと自覚したときにスイッチが入る。そして、ひとたびスイッチが入ると、基本的にオフになることはない。

ハネムーン期

DV (ドメスティックバイオレンス) には、蓄積期、爆発期、安定期というサイクルがあり、これらを繰り返すと言われている。つまり、暴力を振るったあとは、いったん落ち着きを取り戻し、謝罪や優しい言葉をかけてから、また次の蓄積期へと向かう。モラハラについても同様と指摘する人もおり、実際にそのようなサイクルが観察されることもある。

ところがモラハラの場合、このようなサイクルが観察できないことのほうが多い。一部の妻は、「夫はモラ夫だが、優しい期間もある」と話す。しかし詳しく聞くと、サイクルがあるというより、夫がモラハラをしない期間があるだけのことが多い。日常的にモラハラがあると、モラハラがないだけで「優しく」見えてしまうのだ。

他方、モラ夫たちは、モラハラを悪いことだとは微塵も思っていないため、多くの事案において、反省することはない。モラ夫たちの脳内では、「我慢しているのは俺のほうだ」「こんなによくしてやっている」と認識され、DV夫のように反省や謝罪をする夫は少ない。

■ 著者略歴

大貫 憲介 (おおぬき けんすけ)

1959 年生まれ。

1978 年 International School of Bangkok 卒業

1982 年 上智大学法学部法律学科卒業

1989 年 弁護士登録

1992 年 独立し、さつき法律事務所を開設

外国人を当事者とする案件、離婚案件などを含む一般民事事件を中心に弁護士業務を行う。さつき法律事務所は、日本語、英語、ピリピノ語、中国語、朝鮮・韓国語の5ヶ国語対応。

2015 年頃から、Twitter でモラ夫の生態についてツイート (@SatsukiLaw) している。

2018 年9月より、4コマ漫画「モラ夫バスター」を週1本ペースで掲載中。

■ 4コマ・イラスト協力

榎本 まみ (えのもと まみ)

2012 年文藝春秋より「督促 OL 修行日記」でデビュー。

コールセンターで働きながら漫画やコラムの執筆を行っている。

著書に「督促 OL 業務日誌」(メディアファクトリー)、

「督促 OL コールセンターお仕事ガイド」(リックテレコム)、

「モラニゲ〜モラハラ夫から逃げた妻たち」(飛鳥新社) など。